

【 3 】

氏 名	服 部 春 彦 はつ とり はる ひこ
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 56 号
学位授与の日付	昭 和 45 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	フランス産業革命論

論文調査委員 (主 査)
教 授 前川貞次郎 教 授 羽 田 明 教 授 今 津 晃

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、フランスにおける産業革命＝産業資本確立過程の特質を究明するための基礎的作業として、基軸的産業部門の一つとしての繊維工業、とくに木綿工業における工場制度の生成・発展の過程を実証的に分析しようと試みたものである。本論文はフランス産業革命史研究の主要な問題点を検討し、この主題についての著者の立場を総括的に示した序章と、繊維工業の発展過程をその三大中心地たるノルマンディー、アルザス、フランドルのそれぞれについて追求した本論の三つの章とからなる。利用された根本史料は、フランス国立文書館及びセヌ＝マリティム、オ＝ラン、ノール三県の県文書館の所蔵する手稿史料と、フランス国立図書館所蔵の工業統計、調査記録を中心とする刊本史料とに大別される。

「序章 フランス産業革命論の再構成」においては、フランス産業革命の遂行に際して先進国のイギリス、その他の諸国との対抗もしくは競争によって決定的な影響を蒙ったこと、従ってこの国際的諸条件に注目するのが重要であり、さらにその国際的諸条件のうちの最も基本的なものとしてはイギリス製品の流入による国内産業の破壊であり、これに対してフランスは保護制度及び輸入禁止制度の設定でもって対応したこと、などが指摘力説される。そして本論文で解明すべき問題は、このような関税障壁にまもられたフランス繊維工業がいかなる規模と形態とで工場制度への移行を達成したかという点であるとする。またフランス産業革命の開始期については、諸説を検討批判したのち、産業革命遂行のための基本的前提条件——国内における「産業の自由」と、外国貿易における「保護関税制度」の確立——が設定され、機械制生産の導入と定着化によって、工業諸部門が現実急速な量的質的發展を開始した1800年頃に措定する説を提起する。またフランス産業革命における主導部門に関しては、1845～50年ごろまで一貫して繊維工業であったが、この頃を境に鉄道業に移り、以後鉄道及びこれと直結する石炭・製鉄・機械工業の発展が推進力となり、1870年頃までに産業革命の完成がもたらされたという。ところで繊維工業の中でも、フランスでは綿業の比重はイギリスにくらべて、さほど大ではないが、次の二つの理由から本論文では主に綿業をとりあげたとする。すなわち、(1)この部門で産業革命の本質をなす工場制度の形成と旧来の手工業的経営

諸形態の潰滅の過程が最も急速かつ徹底的に進行したこと、(2)この部門こそイギリス資本主義の圧力を最も強くうけ、イギリスに対抗しうる生産力の育成が焦眉の課題とされた部門であったから。

次に本論は、「第一章 ノルマンディーにおける資本制綿業の確立過程」、「第二章 アルザス綿業における工場制度の成立と発展」、「第三章 産業革命期におけるフランドル繊維工業の構造転換」の三章からなり、フランス綿業の三大中心地域について、産業革命以前の生産構造、産業革命期における繊維工業の成長過程、生産技術及び経営形態の変革過程、繊維産業資本の社会的源泉と蓄積様式、製品市場の動向等が、詳細に分析されている。各章で地域別に分析されたこれらの論点を整理・要約すると、だいたい次のようである。

第一に、産業革命直前期（18世紀後半）の繊維工業の構造分析の結果、この工業の生産諸工程（紡績、織布、仕上）が通例それぞれ別個の資本家によって経営されていたこと、賃労働者の協業に基づく集中作業場（マニュファクチャー）は準備工程の一部と仕上（捺染・染色）工程でのみ一般的に形成され、紡績と織布とは問屋制前貸によって主に農村の分散的家内労働者に委ねられていた。第二に、繊維工業の各部門が産業革命期（1800～70）にどのような量的発展をとげたかを統計的に検討すると、どの地域でも生産の成長はめざましいが、地域によってその律動に差異がある。ノルマンディーとアルザスでは19世紀初から1835～45年にかけて最も急激な成長がみられ、それ以後は緩慢化するのに反し、フランドルでは、とりわけ1850～70年に最も強力な発展がみられる。第三に、上述の成長の生産力的基礎である各部門における生産技術の変革とそれに媒介された経営形態推転の過程を分析した結果は、まず各部門での工場制度確立の画期としては、ノルマンディーでは紡績部門が1800年から48年頃、織布部門が1825～69年、捺染部門が1800～40年頃、アルザスでは紡績1803～25年、織布1826～60年、捺染1803～30年であり、フランドルでは綿紡績1800～40年、羊毛紡績1830～50年、亜麻紡績1830～60年、綿織布1830～70年、毛織布1830～70年、亜麻織布1840～70年である。これら工場制生産の確立期の遅速の差とならんで、各地域における工場経営のあり方の差異も注目される。ノルマンディーでは、初期には綿業の三工程がそれぞれ別個の企業によって営まれたが、19世紀半ばには、紡績工場と織布工場が同一企業による統合＝兼業化への移行がみられるのに対し、アルザスでは19世紀初めに形成された三工程の巨大な統合経営が1830年頃から急速に分解をとげ、世紀中葉には紡績・織布工場の兼営企業と捺染専門の企業とが並存し、それと同時に捺染部門は主導的地位を失なう。一方フランドルでは、綿・亜麻工業で紡織いずれかの単純企業が支配的な比重をしめた。いま一つ注目されるのは、ノルマンディー綿業及びフランドル繊維工業の場合、織布工程の機械化が徹底的に遂行されず、手織布が問屋制家内労働の形態で力織機工場と並存しつづけたのに対し、アルザスでは手織布をほとんど一掃して工場経営が全面的に成立したことである。

第四に、綿業における産業資本の社会的源泉とその蓄積様式を検討した結果は次の如くである。(1)フランドルとノルマンディーでは小生産者が問屋織元をへて工場主に上昇するケースがしばしば見られるが、このコースは支配的なものでなく、特に多額の投資を必要とする捺染部門やフランドル綿紡績業では商人資本が工場設立に重要な役割を演じた。(2)アルザスではスイス系商業・銀行資本の大量投下が19世紀初めにみられたが、新しい工場主層の出現によって綿業資本家層の補充と更新が不断に進行していた。

最後に、製品販売市場の構成をみると、主要な販売市場が国内市場にあったことは明らかである。しか

し植民地市場に大量に輸出されたノルマンディー産キャラコ、ヨーロッパ及びアメリカ合衆国市場を重要な販路としたアルザスの高級捺染綿布とフランドルの模様織物など若干の輸出向製品も存在した。そしてこれら国外に販路を拡大しえた商品を生産する織布部門では、機械制工場が全面的な開花をとげたが、国内市場向けに生産された大半の織布部門では機械化は緩慢にしか進行しなかった。この事実はフランス繊維工業の発展様式とそれを規定した歴史的諸事情を考えると、きわめて示唆的である。

論文審査の結果の要旨

フランスの産業革命については、イギリスのそれに較べると、その研究はいちじるしく立ち遅れており特にわが国では注目すべき実証的研究はほとんどない。本論文はこの未開拓な分野における本格的な研究といえる。

本論文において著者が最も力説した点は、イギリスにおくれて開始されたフランス産業革命が、イギリス製品（とくに綿製品）との競争という外的条件に制約されつつ、独自の展開をみせたという点であり、この点を木綿工業を中心に詳細な分析によって具体的に明らかにしようと試みた。著者の視点は妥当であり、その企図はだいたい実現されたといえる。著者はいたずらに理論的考察に偏することなく、手稿史料、調査報告など多くの根本史料に依拠しつつ、綿密周到な実証的態度によって、従来の学説に批判、修正を加え、19世紀フランス綿工業の実態を明らかにしている。この点、著者の業績は高く評価される。

フランス産業革命論としては、もちろん木綿工業以外にも、たとえば絹工業、鉄道業それと関連する石炭・製鉄業などなお本論文で深く考察されていない領域もすくなくない。絹工業については著者もその重要性を認め別個の考察を約しており、他の領域の研究とともに後日に期待したい。

主として木綿工業を中心としているが、本論文はフランス産業革命に関するわが国での最初の本格的実証的研究として、今後の研究に寄与するところ大なるものがあると思う。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。